

清末における下田歌子著『新選家政学』の 翻訳・出版について

韓 韓

キーワード 下田歌子 『新選家政学』 家政知識 良妻賢母理念 清末女子
教育

はじめに

「家政」という言葉は、古くから中国語の中に存在していた。だが、古典中の「家政」とは、家庭における女性の役割とされた家事とは異なり、家長である男性による家全体の運営と管理を意味し、近代女子教育を構成する重要な科目となる家政¹とは異なっている。伝統的な中国社会では、古くから家庭教育において母から娘に、家事以外に養蚕や糸取りの生産活動あるいは祭祀の儀式等を伝授していた。このような母から代々の生活経験を娘に伝授するという家庭内の教育方法が清末まで続いていたのである。

清末の中国は、日清戦争敗戦を機に近代的な教育改革の手本を日本に求めた。日本側は、清政府のこのような要望に対して教育制度の参考提供のみならず、教育指導者や教師といった人材の派遣まで協力していた。²女子教育に関しては、20世紀初頭の清国に招聘された日本人教員の教育支援活動や、日本の家政学・家事教科書の翻訳および『婦女雑誌』における日本の家政知識の紹介という多様なルートによって行われていた。しかし、近代中国女子教育の成立に関する日本モデルの問題は日中教育交流史の研究において見落とされてきた。本論では、清末における日本の家政学教科書の翻訳・出版を代表する下田歌子著『新選家政学』が中国語に翻訳・出版された史実に焦点を絞り、その歴史的経緯を明らかにすると同時に家政学教科書の翻訳が中国女子教育の近代化にもたらした影響を考察する。³

下田の著作の中国語翻訳に言及した研究は、管見では、中国で発表された黄湘金の「從江湖之遠到廟堂之高一下田歌子《家政学》在中国」⁴と、杉本史子の「民国初期における女子家事科教育—その「近代」性と限界について」⁵の二論文しかない。黄の論文は、三つの翻訳版を概説するだけにとどまっているので、本論は、黄の考察成果を参考にしつつ、その翻訳の歴史的な意義を検討する。また、杉本の論文は、清末と民国初期の家事科教育について考察したものであ

るが、家政学教科書については、本論で取り扱う下田歌子著『家政学』の翻訳版のひとつ、曾紀芬訳『聶氏重編家政学』の存在について言及するのみである。

さらに、筆者の調査の結果、黄が取り上げた三点の翻訳版のほかにも、もう一点の翻訳版が存在し、そして、これらはすべて、1893年に出版された『家政学』ではなく、下田が欧米の女子教育の考察で得た見識に基づき一部の内容を改訂して、1900年に再出版した『新選家政学』の翻訳であることがわかった。黄論文も杉本論文もそれらの翻訳版が下田歌子の『家政学』初版の翻訳であると誤認している。⁶本論では、入手が極めて困難であるため内容にまで立ち入って研究されることのなかった四点の中国語翻訳版を調査し、下田歌子原著との比較考察を行い、その翻訳・出版における日本側の姿勢・意図及び中国側の受容・摂取の実態を解明する。

1. 下田歌子と中国

下田歌子（1854 - 1936）は、美濃地方岩村藩の藩士の家に生まれ、幼い頃から儒学の教養を身につけ、18歳の時に女官に抜擢されて宮中に出仕した。その後、和歌の才能が昭憲皇太后に認められ、「歌子」の名を賜って、宮中で和歌を教えるようになる。明治17年に自ら設立した桃夭女塾の実績と皇后の推薦で、華族女学校の教授となり、以来20余年にわたり華族子女の教育に尽くした。その間、1893年から二年間英国王室の皇女教養事情や欧米の女子教育事情を調査するため渡欧した。帰国後、「帝国婦人協会」を設立し、その事業の教育部門として一般女子の教育のために実践女学校を創立した。その後、下田歌子は、愛国婦人会の会長や、順心女学校及び明德女学校の校長をも兼ね、明治・大正期における日本女子教育の指導的立場にあった。彼女の著書は数多くあるが、家庭教育に関するものとしては、『家政学』（1893年）、『婦女家庭訓』（1898年）、『家事要訣』（1899年）、『新選家政学』（1900年）が世に出された。下田は近代日本の女子教育事業に多大な貢献を果たしたといえる。⁷

下田歌子は、日本の女子教育だけでなく、近隣清国の女子教育にも積極的に意欲を示した。陳延媛⁸の考察によると、下田は欧州訪問を通して、西欧からの脅威に対する東洋の隣国に強い連帯感を感じ、「東漸する西洋文明に対応するためには、東洋女徳の美という精神性を、日本だけではなく、東アジア全体と連帯して守っていかなければならない」⁹という自分の女子教育理念を確信し、東洋全体の女性を対象とする教育構想を描いたという。そして、1904年実践女学校の清国女子留学生のために盛大に行われた卒業式で、下田は「私はすでに

七、八年も以前からして、早く貴国の女子を教導しようとして居りましたから、わが校の教員数名を特に選抜して、支那語を習得させて居りました」¹⁰とその心中をはっきり語っている。

この構想は、まず、彼女が設立した実践女学校が清国女子留学生を受け入れたことによって実現された。下田は、開校したばかりの実践女学校において清国の男子留学生とともに来日した彼らの娘や姉妹を積極的に受け入れ始めた。また、「隣邦老大国女子入学志願者のために、その門戸を開く大決心をせられた」¹¹ 下田は、1904年11月に湖南省からの20名の女学生の留学志願を機に、翌年7月に赤坂に分教場を開設して、正式に「附属中国女子留学生師範工芸速成科」を設立し、女子留学生の教育課程として一年制の師範速成科を設けた。その後、実践女学校の留学生部は、1908年に校舎を移転すると同時に師範速成科を廃止し、文部省から「清国留学生教科規定」の認可を得て正規課程を設け、1920年までに、総計200余名の中国人女子留学生を受け入れた。¹² 下田が中国の女子留学生を意欲的に受け入れたのは、東洋全体を視野に取めた女子教育構想実現の一環としてであった。¹³

隣邦清国の問題に対して並々ならぬ関心をもっていた下田は、日本にいながら、早稲田大学を卒業後に清国公使館に勤めていた戡翼翬¹⁴に中国語を習い、来日した清国の教育視察官僚や留学生監督と親交していた。また、革命運動の援助要請活動で来日した孫文とも接触し¹⁵、新しい中国政府のトップとなる可能性をもつ人物との交流を求めていることから、その教育構想を中国で実現しようとしていたことが推測できる。

下田の教育構想については、彼女自身の日本での活動によってだけでなく、当時清国にあった服部宇之吉もそれをサポートしようとした。服部宇之吉¹⁶は、清国管学大臣張百熙の要請を受けて、文部省が派遣した人物で、1902年9月から1908年1月まで京師大学堂師範館の総教習を務めていた。服部の夫人繁子は下田の弟子であり、夫とともに中国滞在中に実践女学校に中国人留学生を紹介するなど、下田と頻繁に書信を交わすほど親交が深かった。服部は、日本の文部省を代表して京師大学堂師範館で中国の教育事業の近代化を指導する立場にあったが、北京に滞在中に下田の教育構想の実現をも支援していたのである。

17

服部が下田歌子を追悼するために書いた「下田先生と西太后」¹⁸によると、彼は北京に到着後、女子教育事業を始めようとして各方面に働きかけてみたが、容易に見通しが立たなかった。その際、恭親王に清国で大きな権限を持つ西太后を説得するよう勧められた服部は、「女子教育を興すの道は、西太后の口から、女子教育の必要を仰せらるるにある。それには皇太后の心を動かす人がなけれ

ばならぬ。而してその人は女子であって、上流社会の女子教育に、経験を有する人でなければならぬ。下田先生を措いては、適当な人がない。下田先生ならば、この場合唯一の適任者である」¹⁹と考えた。そして、下田歌子を西太后に推薦するために、その通訳として妻の繁子に中国語を習わせた。この努力の結果、西太后から「清国の女子教育は一切を下田の指導にゆだねること、自分の宮殿を女学校として提供し、またその資金もすべて負担するから、ぜひ渡清して力を貸してもらいたい」²⁰と下田への認可が下りた。しかし、1908年に西太后が急逝したため下田との面会は実現しなかった。

このように、服部による下田歌子の清国女子教育事業の支援は現実のものはならなかったが、下田の教育理念は彼女が予想していなかった別の形で中国に導入されることになった。それは、中国の知識人による『新選家政学』の翻訳である。まず、次節において、下田著『家政学』と『新撰家政学』についてみる。

2. 『家政学』と『新撰家政学』について

『家政学』²¹（博文館、1893年）は、華族女学校や実践女学校で実際に行った講義を校補したものである。内容としては、上巻の「家事経済・衣服・飲食・本邦料理・西洋料理」および、下巻の「住居・礼法・装飾・書簡・贈品・看病法・母親の衛生および小児教養法・婢僕の使役」から構成されている。当時の日本には家政学に関する著書として『家事要法』（シー・イー・ビーチャル、エッチ・ビー・ストウ著、海老名晋訳、有隣堂、1881年）、『通信教授女子家政学』（瓜生寅著、通信講学会発行、1889年）、『家政学』（清水文之輔著、金港堂、1890年）などがあった。しかし、これらは、西洋の家政学の翻訳、もしくは外国書を参照して著したものであり、下田著『家政学』によって初めて、日本人女性の立場から思考した日本の家政学がようやく最初の一步を踏み出したと評されている。²²

この『家政学』は読者の支持を得て、公刊後わずか四か月で増補訂正第二版が出された。その凡例に「刊行後、未だ数月ならざるに、書肆、既に、欠耗を訴へて、再刊を促すこと頻りなりし」²³との記述からその評判が窺える。この増補訂正版は、誤植や文字の修正をただけで大幅な改訂をしていない。その後、下田は、欧米の女子教育視察で得た知識や体験を加えて『家政学』を大幅に改版し、家政学の体系化と内容の科学化を心がけて『新選家政学』（金港堂、1900年）²⁴を出した。『新選家政学』の目次を挙げると、上巻は「家内衛生・

家事経済・飲食・衣服・住居」、下巻は「小児教養・家庭教育・養老・看病・交際・避難・婢僕使役」となっている。つまり、『新選家政学』は、上巻の家事経済と衣食住より家内衛生を重視し、下巻では小児教養と家庭教育を第一章と第二章として取り上げ、以前の「礼法・装飾・書翰・贈品・母親の衛生」の部分を削除して、かわりに「養老」と「交際」の章を追加した。そのほか、衣服についての記述を簡略化し、それまで下巻の「住居」の章に組まれていた火災・風災・水害・震災の内容を「避難」という新たな章にまとめた。また、内容的には『家政学』が日常生活の実際を主体にして書かれた実用的な教科書であるのに対して、『新選家政学』は、家政学の基礎的な内容を総括する家政学概論といえる。²⁵改訂後の『新選家政学』は、「女子師範学校、師範学校女子部及び高等女学校、家事教科用の為、並びに、家事を教ふる者の参考」²⁶のために著されたことを凡例に明記している。下田は、当時の中流階級が生活改良と子育てを家庭の主婦の中心的役割と考えるようになった時代の変化に伴い、家内衛生や児童教育に関する知識を重視し、それぞれを上巻と下巻の第一章に据えた。また、家政と女性の関係については、総論において以下のように述べている。

男の外を理め、女の内を整ふるは、実到天賦の職責にして、能く其性情体質に適合せるものといふべし。故に女子は、専ら家事内政に與りて、常に、細密周到なる注意を以てし、其外に出でて、大事に當り、心を碎き、力を竭す、男子の業を陰に助けて、毫も内顧の虞なからしむるこそ、其本分を尽せりとはいふなれ。されば、女子が、家事を整へたる功績は、男子が国務の上に顕したる名誉に、聊も変ること無し。²⁷

このように、下田は、家政学を単純な学問として論じるのではなく、家政の管理を女子教育の本質的内容としている。彼女は国家主義的見地から明治期の良妻賢母主義女子教育を進めた教育者の一人として、「男は外、女は内」という儒教的な性別役割分業観に基づいて家政能力を女子に求めているのである。

3. 清末における『新選家政学』の翻訳

日本で評価された『新選家政学』は、中国においても下田歌子の影響力とともに知識人に注目され、1902年から1903年までの短期間に、四点の中国語翻訳版が現れた。以下の表にそれぞれの書誌情報を整理してみる。

番号	タイトル・訳者	出版社・出版年月・所蔵
1	『家政学』・銭単士釐	不明・光緒 28 年（序文は陰暦 5 月に作成）・中国国家図書館蔵
2	『新編家政学』・不明	作新社・光緒 28 年陰暦 10 月 16 日・上海図書館蔵
3	『新撰家政学』・湯釗	廣智書局・初版：光緒 28 年 11 月 15 日、再版：光緒 31 年、光緒 33 年、民国 31 年・中国首都図書館蔵・上海図書館
4	『聶氏重編家政学』・曾紀芬	浙江官書局・初版：光緒 29 年 5 月、再版：光緒 30 年・中国国家図書館蔵・東京大学東洋文化研究所蔵

出版社・訳者によって訳書のタイトルはそれぞれ異なるが、筆者が原著と照らし合わせた結果、多少の改訳はあるが四点とも『家政学』ではなく『新選家政学』を翻訳していることを確認できた。また、2、3 の版は再版も出された、廣智書局の版は、増版が四回まで出された。日本の書籍が大量に中国語に翻訳された日中文化交流の隆盛期であったとはいえ、四つの出版社から訳書が出された例はごく稀である。本節では、この四点の翻訳版の訳者や出版経緯について詳しく考察する。

銭単士釐（銭は夫の苗字であり、以下は本名の単士釐と記す）が翻訳した『家政学』は、洋風の装丁を採用せず旧装本のままであり、奥付もないため出版社や出版年月についての記載がない。夫銭恂が書いた序文の日付が光緒 28 年 5 月であることから判断すると、作新社および廣智書局の出版日より五か月ほど早いため、本論では、『新選家政学』の最初の中国語翻訳版を単士釐の『家政学』と見なす。

単士釐（1858－1945）は、浙江省蕭山の出身。幼年時代に良好な家庭教育を受けた。その夫である清国外交官の銭恂²⁸（1853－1927）は 1899 年に日本に駐在した際、単は二人の息子を連れて初めての海外の旅を経験した。その後、夫に同伴してヨーロッパを歴訪した彼女は、自分の外遊見聞を『癸卯旅行記』（1903 年）と『帰潜志』（1903）²⁹ という二冊の著書に記録した。『癸卯旅行記』序文には、日本について「（引用者注：1899 年以降日本へ）歳として行かざる無く、或いは一航、或いは再航す。往復既に頻にして、寄居（日本での滞在と生活）も又た久しければ、東国（日本）を視ること郷井（故郷）の如し」³⁰ と頻りに日本を訪問し、日本に対する特別な感情を抱いていると語っている。また、単

は、長男の妻を実践女学校最初の中国人女子留学生として入学させ、下田歌子と親密な関係を築いた。単が1906年の帰国直前に下田歌子との別れを惜んで作った「丙午秋留別下田歌子」という詩から、二人の友情と『新選家政学』の翻訳について窺うことができる。

六載交情幾溯洄、一家幸福荷栽培。扶持世教垂名作、伝播徽音愧訳才。全国精神基女学、隣邦風氣頼君開。驪歌又唱陽関曲、海上三山首重回。³¹

単は、まず、六年にわたる二人の親交を回顧し、長男の妻が下田のおかげで実践女学校を卒業したことへの謝意を表す。そして、下田の著作（『新選家政学』）を「扶持世教」の名著と高く評価し、その名著を翻訳して中国に紹介した自分の才能の拙さを恥じる。最後に、一国の精神は女学に基づくので、この翻訳が隣国の中国に新しい気風をもたらすことを期待するという。また、銭恂はこの訳書の序文において妻の翻訳について以下のように述べている。

予が妻単士釐は、少々日本語に通じており、日本の学者下田歌子著『家政学』から平易で日用に役立つ内容を選んで漢文に逐語訳し、それによって中国人を啓蒙すること、(中略)女子教育の嚆矢になることを期待している。

32

銭は、また、国民の育成に家庭教育が重要であることを強調し、母親が家庭教育の責務を担当するために、女子教育を振興しなければならないという考えを示している³³。そして、女子教育の振興については、「女学が一気に振興できるものではなく、まず女子の家事の切り盛りや育児養老の能力の養成から始めて、規則に従えば旧習を捨てることができる、それでだんだんと文明の国になっていく」³⁴という。つまり、女子に家政学を習得させることが文明の国民を育成するための基礎であることを認識している。

次に作新社が翻訳した『新編家政学』についてみる。作新社は、下田歌子が中国人留学生と積極的に交流する中で知り合った戢翼翬と共同で設立した出版社である。戢翼翬は、在日留学生団体「励志会」が東京で設立した翻訳・出版団体である訳書彙編社³⁵の社長を務め、東京で『国民報』³⁶を創刊した経験もある。下田歌子が1902年に戢翼翬と共同で設立した作新社は、雑誌『大陸』を発刊したほか、主に日本の書籍を大量に翻訳・出版した。³⁷ 作新社によって翻訳・出版された『新編家政学』の奥付には訳者の項目がないが、著者と発行者はすべて作新社と記載されている。その序文は、呉汝綸³⁸が寄せたものである。

呉は、西太后清政府が変法政策に転換した際、1901年に管学大臣張百熙の要請によって京師大学堂の総教習に就任し、1902年に自ら申し出て日本の教育事情調査のために5月15日から10月20日まで訪日した。

呉が日本訪問を記録した『東遊叢録』³⁹には、日本の政府機関及び官・私立大学と各種学校が行った清国教育考察団に対する協力について詳しく記している。それによれば、日本側は、管学大臣張百熙が近代学校教育を構想していることを知って、文部省において呉一行のために日本の学制を講義する講学プログラムを作って対応した。その際、文部大臣菊池大麗、外務大臣小村寿太郎、元老・政友会総裁伊藤博文をはじめ、日本教育界と政界の要人が呉に面会し、清国の教育事業に対して莫大な助言を与えたことがわかる。

この折に、日本側は、呉に女子教育の情報についても提供した。例えば、前山陽高等女学校校長望月興三郎は、伝統を重視しながら女子の特性に適した近代的な教育法を取り込むという日本の経験を提供した。これは、清国がその体制の維持するために必要とした伝統と近代化のバランスをとるための方策であったといえる。張百熙へ宛てた呉の書簡には、「昨日の交詢社の宴会では、社長の大鳥圭介（引用者注：学習院院長兼華族女学校校長、駐清特命全権公使を経た人物）が女学校を興すことが大切だと私に勧めた。私はどれもが今の中国にとって必要でその制度化が急務であると考え、これも直ちに管学大臣に伝えるべく、手紙をしたためる次第である」⁴⁰とあり、その助言を早急に張百熙に報告したことがわかる。

また、呉は下田歌子によって実践女学校の見学にも招かれ、「女子の教育に就て」という題の講演を行った。その中に以下のような文章がある。

（我が国は）文明的科学的教育は未だ曾て受けて居らぬので御座います。御国に於ては、早くより女子教育の必要なることを認められ、女子の人材を養ふことに務められたるは、実に感服の外有りませぬ。殊に家政学裁縫等の学科を上下貧富の区別なく教養せらるることは、実に処世上肝要のことと思ふ、又、其他化学理学衛生などに至るまで、それぞれ研究せらるるは是れ又缺くべからざる科目と思ひます。⁴¹（引用者下線）

呉は講演において、日本の女子教育の振興ぶりに感心し、特に日本の女子家政教育に関心を寄せて、中国の女子教育に家政科目を入れたいという考えを示している。また、呉は、華族女学校を見学した際、下田について、「（引用者注：五月）廿九日赴華族女学校学監下田歌子従四位兼教皇女二人謂之常宮周宮其人深於教育学此学校主辦廿余年頗以吾国女学為意」⁴²と語っている。このような

経緯から見れば、『新撰家政学』が作新社によって翻訳・出版された際、清国学部で影響力のある呉汝綸に序文が依頼されたのは当然であったといえよう。

下田の女子教育理念に賛同した呉は、その序文に「(下田)は我が国(中国)では万事が革新の最中と聞き、女子教育が最も緊要だと認識している。家政学の本を贊助して中国語に翻訳し、我が国に輸出しようとするその思いに感動せざるを得ない」⁴³と記し、また、中国の古典「国を治めんと欲する者は、先ずその家を斉う、家は国の本である」を援用して、「論者は西洋の富強が家庭教育に基づくものであるという」⁴⁴と下田の家庭教育重視の態度に賛意を示し、家政学と国家富強の関係を強調している。

中国の近代的教育制度を策定するために来日した呉汝綸の教育視察団へのこのような対応ぶりからも窺えるように、日本は清国の教育制度改革に積極的な協力政策をとっていた。下田歌子もこの機会を生かして、自分の教育理念が清国の教育政策に組み込まれるように努力した。

作新社版が上梓された僅か一か月後に廣智書局⁴⁵も湯釗による同書の翻訳を出した。廣智書局は当時、梁啓超が実際の運営に当たっており、訳者の湯は梁の弟子でもあった。湯の序文は「下田歌子著『家政学』は、家庭の義務についてかなり詳しく記述し、我が国の『少儀』『内則』の遺風を継いでいる」⁴⁶と述べているから、彼が下田の家政学と中国の伝統的な女子教育思想との一致を認識していたことがその翻訳の大きな理由として考えられる。廣智書局のこの訳書は、少なくとも光緒31年(1905)、光緒33年(1907)と民国31年(1942)に三度版を重ねた。

筆者の調査によれば、清末に出版された『新選家政学』の最後の翻訳版は、曾国藩の末娘曾紀芬(1852-1942)が訳した『聶氏重編家政学』⁴⁷である。曾紀芬は、号を崇徳老人と称し、湖南省湘郷県の出身、24歳で湖南衡山の聶緝槃(1855-1911)と結婚した。曾は、翻訳の経緯について以下のように述べている。

五月に、日本の下田歌子著『家政学』(引用者注:『新選家政学』)を読み歓喜した。だが、その内容は吾国の国情に合わないところがあるので、中国人に紹介するためにその優劣を検討し、息子の其昌、其傑及び姪婿の劉寿霖に写し取ることを命じて、安慶抗署に於いて印刷した。⁴⁸

曾が下田の著作に示した強い関心は、おそらく彼女が受けた教育と深く関わっている。父である曾国藩は「仁、義、礼、智、信、温、良、恭、儉、讓」をもって子女を教育し、女子に対しては一日になすべきことを詳しく規定し、調理、

女紅、紡績を常に検するほどの厳しさである。⁴⁹ このような家で育てられた曾紀芬は嫁してからも家訓に従い、翻訳書の叙言では「十年の間、舅姑に仕え、夫を助け、子を育て、相嫁同士と付き合い、そして息子の嫁、妾と婢僕との間にわずかのわだかまりや齟齬もない」⁵⁰ と述べている。このように中国女性の伝統的道德を実践してきた曾紀芬は、その序言で「国の隆盛は家庭に基づき、そして家庭の振興は教育に関わっている」⁵¹ との認識を示し、下田の著作に「女子を啓発することと国の綱常を整えること」⁵² を期待した。曾紀芬は、一族の女子のために『聶氏重編家政学』を翻訳した⁵³ が、翌年の夏にすでに再版が出ていることから、家政学に対する需要と社会的関心の大きさを推測することができる。

本節で考察したように、清末の中国では下田歌子の『新選家政学』が大きな注目を浴び、二年間の間に四点の中国語翻訳版が出版され、版を重ねた。これは、女子の学校教育制度がまだ確立されていない1902年から1903年までの早い段階に、一部の有識者が女子教育に関する先進的な理論と教材を切望していたことを示している。訳者たちは、国家の富強を実現するために女子教育の重要性を十分に認識し、東洋女性の美德を称揚する下田の『新選家政学』を中国に紹介して近代的な中国女子教育の嚆矢とした。次の節においては、四つの中国語版の内容に立ち入り、それぞれの訳者がどのような取捨選択を行い、それによって中国の女子をいかに啓発しようとしたのかを詳しく考察する。

4. 『新選家政学』の中国語翻訳版の比較

まず、『新選家政学』と四点の訳版の目次を表にまとめて比較してみる。

巻	章	『新選家政学』	『家政学』	『新編家政学』	『新撰家政学』	『聶氏重編家政学』
		下田歌子	銭単士釐	作新社	湯劍	曾紀芬
上 巻	一	総論	総論	第一編：総論		一：総論
	二	家内衛生	家内衛生	第二編：家人之監督 (教育幼児、家庭教育、 小学教育、養老、 病者之看護)		二：教育初基
	三	家事経済	家事経済			三：教育漸次
	四	飲食	飲食			四：教育総義
	五	衣服	衣服	第三編：一家之風範		五：家庭表率

下 巻	六	住居	住居	(家庭習慣、児女儀 範、温良之徳、規則 秩序習慣、早起利 益、家庭之陳設、戸 内快樂、交際)		六：理財
	一	小兒教養	小兒教養		小兒教養	七：養老
	二	家庭教育	家庭教育	第四編：衛生 （光線 空氣土地、室内運動 身体之清潔、飲食、 衣服、住宅、避難）	家庭教育	八：治病
	三	養老	養老		養老	九：衛生
	四	看病	看病		看病	十：交際
	五	交際	交際	第五編：一家之財政 （財政之要旨、出 納、貯蓄、購求物品）	交際	十一：避難
	六	避難	避難		避難	十二：婢僕使役
	七	婢僕使役	婢僕使役		婢僕使役	

目次だけから見れば、原著を忠実に訳したのは単士釐の『家政学』だけである。湯釗は、原著の下巻だけを翻訳している。曾紀芬の翻訳版は原著の「飲食」「衣服」「住居」の三章を「衛生」に編入し、「教育」の部分を増やして三つの章を立てた。また、原著にない家庭における礼儀作法を「家庭表率」として一つの章にまとめた。作新社の版は、原著の章立てに従わず、「家人之監督」「一家之風範」「衛生」「一家之財政」という四編を立て、原著の内容を再編した⁵⁴。さらに編訳者は、第二編「教育」の部分に「小学教育」、「風範」編に礼儀や徳育に関する内容を新たに書き加えた。つまり、曾紀芬と作新社は下田の『新選家政学』を翻訳した際、当時の中国の実情に合わせて、初等教育をも含めた女子教育の啓発と道徳の重視が不可欠と考えていたことがわかる。

また、各翻訳版の内容を原著と比較した結果、原著を忠実に翻訳したのは、単士釐と湯釗の訳版であることが明らかになった。作新社は原著の目次を大きく再編し、「一家之風範」という一節を付け加えた以外には、原著の内容をそれほど変更していない。これに対して、曾紀芬は、中国の実情に合わせて大胆な編訳を施している。以下に、そのまま中国に紹介された家政観念と知識および曾の改訳について詳しく考察する。

まず、原著第一章の「家内衛生」は、『家政学』から『新選家政学』への増補改訂に際して新たに設けられた独立の章である。『家政学』は、母親の衛生について少し触れているだけだが、『新選家政学』の第一章では、「光線、空気、土地、用水、食物」を「家内衛生」の内容として論じている。下田は、「文明の民は能く衛生の必要を知るのみならず、又、能く之を実行す」⁵⁵と衛生観念を文明の一要素と捉えている。「家内衛生」の章で挙げられた注意事項には、伝染病、

新鮮な空気、清潔な水、土地、衣服の選択、身体及び衣食住等の清潔、運動がある。また、「土地」の節では「各種の伝染病中、腸室扶斯虎列拉、赤痢病の類ひは、必ず土地と関係を有す」⁵⁶と述べている。衛生における伝染病への注目は、欧米での見聞に触発されただけでなく、当時の日本の社会情勢とも関わっている。日本では、明治初年にコレラ・赤痢・腸チフスなどの伝染病が大流行して多くの命が失われたため、学校やメディアによる保健衛生の啓蒙活動が盛んに行われていた。下田は、『家政学』の改訂を機に「家内衛生」を家政学の最も重要な内容として盛り、主婦の保健衛生意識を促すことによって「公衆衛生」を改善しようとしている。この意図について、作新社の版は「家内衛生」の内容を第四編「衛生」に取り入れ、原著の内容を忠実に翻訳した。「衛生」を総括した最後のまとめに「このように家庭の衛生は家政学の中の重要な部分である。それ故著者はこの篇に最も注目している」⁵⁷と下田の意図を特別に強調している。これに対して、曾紀芬は「衛生」を第九章におき、衛生と文明の関係や伝染病への用心を省き、中国の「飲食」「衣服」「住居」をあげ、中国の伝統的な衛生法の観点からその内容を置き換えた。例えば、原著は食物に含まれる澱粉質、蛋白質、脂肪分、水分、糖分、塩分といった近代栄養学に基づいた健康観念の紹介に対し、曾は、漢方に基づく食養生の視点から各種類の食物が持つ効用を述べている。

次に、「家事経済」の章では、主婦に国家の視点から節約の重要性を説き、収入を計って支出を考えること、家計簿記法、貯金の方法などを紹介している。日清・日露戦争後の日本では、資本蓄積と軍事力拡大の方針が強く打ち出され、この国策のもとで、家庭における主婦の節約管理が重要視され、「家政学」として女性に簡単な経済管理の方法を伝授することが求められた。このような知識は中国の女性にとっても必要であった。

下田の原著では近代的な衛生知識や家庭経済観念を取り入れながらも、「飲食」「衣服」「住居」の三つの章において、日本固有の衣食住文化と風習をあげ、衛生面、環境面、経済面を考慮してその大要を説いている。前述のように曾だけはこの部分を「衛生」の章で取り上げた。

また、下田の「小児教養」の章では、胎育・哺育・幼児の衣食住・病氣・運動の項目から育児法について紹介し、次の章では、家庭教育の必要性や目的と方法を説いている。日本では日露戦争後、子供を国家の有用な国民に育てるために、その健康管理と教育が主婦にとって最も重要な課題となった。曾は育児と教育をもっとも重要視し、総論の次の第二章「教育初基」に原著「小児教養」の内容を取り込んだほか、「教育漸次」と「教育総義」の二章を新たに設けて、勉学ではなく主に生徒の品行と性質、賞罰や懲戒の規則、倫理、言動、客に対

する礼義、食事の作法、外出の規則と制約の要点について論じている。原著では知育も徳育も重要であると主張するが、当時の中国では、男子向けの学校教育体系が作られたばかりで、女子向けの学校教育はまだ制度化されておらず、家庭教育の担い手となる主婦自身も教育を受けていなかったため、実際には原著が主張する家庭での知育教育は極めて困難であった。それゆえ、曾紀芬は教育の内容を殆ど徳育にすり替えたのだと考えられる。

また、下田は家庭医学知識と看護法も取り入れられている。これも、戦争の影響によって主婦にも基本的な医学知識と看護方法の習得が要求されたからである。このような技能は、戦時だけでなく普段の家庭生活においても必要と認識されるようになった。当然、この分野は、当時の清国にとっても必要とされたため、各翻訳版はこれを忠実に訳している。

そのほか、原著では明治という開化の時代にふさわしい交際法も紹介されている。また、日本では自然災害や火災が多発するため、防災知識も家政学の内容として盛り込まれており、これらもそのまま中国に伝えられた。

このように、『新選家政学』は、明治時代に起きた社会変化が女性に求めた近代的な家政管理法を伝授し、その習得によって良妻賢母を養成するための教科書である。具体的に、衛生・栄養・保健観念、育児方法、家族管理、経済観念、家庭看護法など近代的科学知識に裏付けられた家政運営の原理を説いたものである。原著はさらに、知識の伝授だけでなく、一家経営の担い手でもある主婦の家政運営が家庭の幸福をもたらし、それが一国の富強にもつながることを強調している。清末の中国に紹介された『新選家政学』の四つの翻訳版は、一部の内容の書き換えはあるものの、原著が主張している家政管理理念および、家政の国家への影響とその重要性を変更せずに伝えたのである。『新選家政学』の内容が、基本的に国策の良妻賢母主義に沿って展開されていることは明らかである。このように、日本から翻訳された下田の『新選家政学』は、知識の導入と共に日本の国策と結びついた良妻賢母の女子教育思想をも中国に紹介したのである。

近代中国における良妻賢母主義については、清末維新派の担い手であった梁啓超が女子教育の必要性を説いた「論女学」（『変法通議』、1897年）が嚆矢とされている。⁵⁸ 梁は「分利之害」（女子職業教育の提唱）、「無才の累」、「母教」、「胎教」という四つの方面から論を展開したが、『新選家政学』はそれと部分的に対応している。また、「論女学」の中核となる主張は、女子教育の発達が内助をもたらし、国家の富強に結びつくことである。つまり、梁の「論女学」と下田の『新選家政学』は、ともに近代の国家主義に基づく良妻賢母女性観を体現している。梁の理論的な言説に対して、『新選家政学』の翻訳は清末の良妻賢母

言説に新しい具体的・実質的な内容と意味を付与しただけではなく、良妻賢母の教育方法をも呈示したのである。

5. 『新選家政学』の影響

下田歌子の『新選家政学』は、中国の女子教育がまだ制度化されていない時期に四点の翻訳版によって中国に紹介され、再版も加えて考えるならば、その影響力の大きさが容易に察せられる。湯釗は翻訳版の凡例に「近年、中国の女子教育が次第に発展し、女学校の設立もさほど遠くはない。将来、本書が教科書或は参考書として有益なものとなることを信じる」⁵⁹と記して、女子教育への期待を表明している。

また1902年から1903年にかけて、下田歌子に対する清国メディアの関心も非常に高かった。例えば、『選報』に「下田歌子が同文学校での演説」⁶⁰（1902年6月16日）、『江蘇』に「欧米諸国女子の体育—下田歌子の欧州女子教育視察日記」⁶¹（1903年4月27日）などの記事が見られる。特に1903年第9期の『女報』は、成瀬仁藏著『女子教育論』の中国語訳連載を中止し、同じ欄に「日本華族女学校学監下田歌子論中国女学事」を掲載した。⁶²メディアにおいて「日本女子教育の大家」⁶³と呼ばれた下田歌子の教育活動は中国の教育界に注目され、清朝政府当局も、彼女に厚い信頼を寄せた。1902年に公布された「欽定学堂章程」には女子教育についての規定が何もなく、1904年に張之洞、張百熙が改訂した「奏定学堂章程」は女子教育を家庭教育の中に組み込み、中に「蒙養家教合一」の法令が家庭用教科書について以下のように規定している。

中国古来の婦人道德を説いた『女誡』などを適宜に編纂して各家庭に配布し、また外国の家庭教育書のうち、平正簡易にして中国の婦職と相悖らざるもの（例えば日本下田歌子著わす所の『家政学』の類）を翻訳して広く刊行、配布する。⁶⁴

つまり、下田の『家政学』（『新選家政学』）を、『孝経』などの官製女子用教科書と並べて女子修身書として推奨したのである。

また、1907年になって初めて女子学校教育を制度化した「奏定女学堂章程」には、家政について「家と国とは密接な関係にあり、家政が修められれば、国風も繁栄する。家政を修めるためには、まず女子にあまねく教育を授け、礼法を守らせることが必要である。また、女子教育は国民教育の根基であるが故に

凡そ学堂教育は、必ず最も良善の家庭教育を以て補助として、始めて完備に至る。そして家庭教育の良善を欲せば、専ら賢母に頼り、賢母を求めんと欲せば、必ず完全の女学を要とする」⁶⁵と記され、家政が良妻賢母育成ための重要科目に定められている。⁶⁶ これらの家政科目は中華人民共和国が成立する直前まで継承され、家事科は民国三十年代になると職業教育の内容としても重要視された。清末・民国期の女子教育における「良妻賢母」の育成方針および家政科目の重視は、本論で取り上げた下田の『新選家政学』の翻訳の影響と切り離して考えることはできない。

下田は、幼少期に儒教的教育を受けられ、桃夭女塾では、『女四書』などの教科書を使用して、儒教的女徳の涵養を前面に押し出していた。⁶⁷ 彼女はつまり、「良妻賢母」を「東洋女徳の美」を引き継ぐ女子教育理念として理解したのである。下田の教育理念が清朝学部認められたのは、従来の婦徳観との連続性を重視し、そこからさほど逸脱しない範囲で新学問を身に付けた女性を養成するという当時の清朝政府の女子教育の方針と一致していたからだといえる。また、下田とその著作が、清国で異例ともいえるほどの影響力を發揮できたのは、下田や服部宇之吉の尽力、日本の教育経験から学ぼうとする呉汝綸ら清朝政府の代表的官僚や一般知識人の存在以外に、明治日本が諸般の事情から中国における教育利権を狙っていたこととも深く関係していたといえる。

まとめ

本論では、近代日中の教育交流が盛んに行われた 20 世紀 10 年代に、明治日本の女子教育の重要な内容となる家政学の代表的なテキスト・下田歌子著『新選家政学』が中国に翻訳・紹介された史実について詳しく考察した。この翻訳の影響によって、家政科目はほぼ半世紀にわたって近代中国の女子家庭教育及び学校教育の教授内容とされたのである。そして、この家政学教科書は、社会・国家の基盤としての家庭の運営から近代化を進め、女性をその担い手としてクローズアップした。つまり、明治期の国策となる良妻賢母主義に沿って執筆された『新選家政学』は、梁啓超らの維新運動をきっかけとして中国に紹介された良妻賢母の概念にその内実を付与し、同時に良妻賢母を養成するための具体的手法をも提供したのである。このように、近代国家の実現を目指した清国では、明治日本によって提供された女子教育の一つのモデルに則って、国家的見地から女子教育の方向が定められ、その教育内容においても日本と共有されていたといえる。

注

- 1 近代女子教育における「家政」は、漢語の「家政」本来の意味とも伝統的女徳教育とも異なる新たな意味内容をもつ概念である。
- 2 阿部洋『中国の近代教育と明治日本』龍溪書舎、2002年
- 3 清末における日本の家政学教科書の翻訳は、服部繁子著『清国家庭及学堂用家政学』、清水文之輔著『家政学』、塚本はま子著『家事教本』、後閑菊野・佐方鎮子著『家事教科書』など数点の翻訳書がある。それらについては別稿で論じる予定である。
- 4 山西師大学報社会科学版、2007年5期、p.88 - 92。
- 5 杉本史子『立命館言語文化研究』立命館大学国際言語文化研究所編 13(4)、p.3 - 19。
- 6 黄論文は、単士釐と曾紀芬の中国語翻訳版目次を挙げて比較しているが、それと下田原著の実物との比較を行っていないため、『家政学』の翻訳ではないことが分からなかった。杉本の論文では、「近代家政学の書として紹介された最も初期の代表的なものは、曾国藩の末娘である曾紀芬が翻訳した『聶氏重編家政学』（1903年）であろう。これは一八九三年に出版された下田歌子の『家政学』を翻訳したものである」と記している。杉本、前掲論文、p.6。
- 7 下田歌子については、『図説教育人物事典』上（唐澤富太郎編、ぎょうせい出版、1983年、p.898 - 902）および『下田歌子先生伝』（故下田校長先生伝記編纂所、1989年）による。
- 8 陳姪媛『東アジアの良妻賢母論』勁草書房、2006年
- 9 陳姪媛、前掲書、p.92。
- 10 前掲『下田歌子先生伝』、p.400。
- 11 同上、p.394。
- 12 周一川『中国人女性の日本留学史研究』、p.87。
- 13 陳姪媛、前掲書、p.93。
- 14 戴翼翬（1878 - 1908）は、湖北省の出身で、1896年に総理各国事務衙門によって最初の留日学生として選抜された。1899年に、嘉納治五郎の亦楽書院（後、宏文書院と改名）を卒業後、東京専門学校に入学した。
- 15 小野和子「下田歌子と服部宇之吉」（『近代日本と中国』上、竹内好・橋川文三編、朝日新聞社、1974年、p.207）に、下田を孫文に紹介したのは、黒竜会の清藤幸七郎の妹秋子であり、下田と孫文が日光で会談したことを記している。また、一人の中国人女学生の日本での教育を下田に託す孫文の書簡が発見されている。（前掲『下田歌子先生伝』、p.418。）による。
- 16 服部宇之吉（1867 - 1939）は、漢学者であり、生涯を通して中国と密接にかかわりつづけた。彼は「対華文化事業」の関連で3回にわたって中国に

滞在した。

- 17 陳延潁、前掲書、p.99 - 103。
- 18 「故下田校長先生追悼号」『なよ竹』第 25 号、1936 年 7 月、前掲書、『下田歌子先生伝』に収録。
- 19 同上、p.415 - 416。
- 20 「下田歌子と服部宇之吉」前掲書、p.217。
- 21 テキストは『叢書・近代日本のデザイン 5』（ゆまに書房、2009 年）に収録される初版の『家政学』（上・下、博文館、明治 26 年）を使用する。
- 22 飯塚幸子・大井三代子「下田歌子と家政学」『実践女子短期大学紀要』28、2007 年、p.5。
- 23 第 2 版、博文館、1893 年
- 24 テキストは『復刻 家政学叢書 4』（第一書房、1982 年）に収録されている『新選家政学』（金港堂、1900 年）を使用する。
- 25 前掲「下田歌子と家政学」、p.7。
- 26 下田歌子、前掲書、『新選家政学』の凡例から引用。
- 27 下田歌子、前掲書、p.4 - 5。
- 28 銭恂は、浙江省呉興の人。銭は、伝統的な学問と西学の双方に通じ、1884 年、李鴻章の幕僚であった薛福成の門人となり、外交官としての活動に必要な知識と技能を身に付けた。その後、清国の外交官として欧州に駐在していた。1897 年に湖北を訪問した日本の陸軍大佐神尾光臣らの「日清英提携論」の影響で、銭は張之洞に湖北省が率先して留学生を日本に派遣するよう提言する。1899 年、銭は湖北省留学生派遣の事前準備で初めて訪日した。銭恂に関しては『癸卯旅行記訳注—銭稻孫の母の見た世界』（銭単士厘撰、鈴木智夫訳注、汲古書院、2010 年）による。
- 29 銭単士厘『癸卯旅行記・帰潜記』湖南人民出版社、1981 年。1904 年に東京の同文印刷舎より刊行された版もある。
- 30 訳文は、前掲書『癸卯旅行記訳注—銭稻孫の母の見た世界』（p.5）による。原文：「無歳不行、或一航、或再航、往復已頻、寄居又久、視東国如郷井」
- 31 『受茲室詩稿』単士釐著、陳鴻祥校訂、湖南人民出版社、1981 年、p.45。
- 32 原文：「予妻単士釐稍通日本文読彼邦女学者下田歌子所著『家政学』取其浅近而切於日用遂訳為漢文欲以誘啓華民（中略）抑即此以為女学之嚆矢未可知也」
- 33 原文：「養成国民者、所謂家庭教育者非為母者之責而誰責耶欲為母者曉然担任此責而无愧又非大興女学不可」
- 34 原文：「女学非可以驟興則先求婦女於持家育兒養老教大端能從規則能去俗習即浸浸乎漸入文明之域」
- 35 1901 年に設立された訳書彙編社は、主に定期刊行物『訳書彙編』（月刊）において、日本の書籍や日本語に訳された欧米の書籍を中国語に翻訳して連載し、その後一冊の連載が完結すると単行本として出版するという形をとった。上海に総發行所を、北京、香港、台湾、浙江省等十数か所に販売処を設けた。

- 36 『国民報』は、1901年5月10日に日本で創刊された新聞であり、愛国主義に基づく中国民族の独立と民権の確立を宣伝することを目的とする。
- 37 『中国人留学日本史』実藤恵秀著、譚汝謙・林啓彦訳、香港中文大学出版社、1982年、p.14。
- 38 呉汝綸（1840 - 1903）は、安徽省出身の著名な古文派の学者であり、洋学にも造詣が深かった。そのため、曾國藩や李鴻章に重用され、天津府知府や深州直隸州知州などを歴任、蓮池書院院長も務めた。
- 39 『東遊叢録』日本三省堂書店、1902年、近代デジタルライブラリー収録。
- 40 「尺牘」巻4、p.392 - 394。（『呉汝綸全集』呉汝綸撰、施培毅・徐寿凱校正、安徽古籍叢書黄山書社）による。和訳は、董秋艷「日清戦争後中国における日本の女子教育情報：呉汝綸(ウルウルン)による日本視察(1902)を通して」（『日本の教育史学：教育史学会紀要』55号、2012年、p.72-84.）を参考。
- 41 呉汝綸氏講演、大澤豊子速記、『日本婦人』36号、帝国婦人協会、1902年10月25日、p.25 - 28。
- 42 「摘鈔日記」、前掲『東遊叢録』、p.24。
- 43 原文：「今聞吾国万事更新以為莫急於女教尤欲有所贊助家政学一書（中略）訳為漢文欲以輸之吾国其意可感也」
- 44 原文：「論者謂西人之富強乃一源於家教」
- 45 1898年に、香港の馮鏡如・何澄らによって上海で設立された出版社であり、西洋や日本から思想と科学に関する書籍を大量に翻訳して出版した。
- 46 原文：「日人下田歌子著『家政学』於家庭義務言之詳矣駸駸乎吾『少儀』『内則』之遺意焉」
- 47 テキストは、浙江官書局の光緒三十年夏（1904年）の再版を使用する。凡例には、再版の際に補校を行ったことについての記載がないため、1903年の初版と同じものであったと考えられる。
- 48 原文：「五月間、読日本下田歌子所著『家政学』而喜之。稍嫌其與吾国国情不合、因為斟酌損益以餉国人、命其昌、其傑兩兒及侄婿劉壽霖寫定之、刻於安慶抗署」、『曾宝蓀回記録』（曾宝蓀、岳麓書社、1986年）に収録された曾紀芬「崇徳老人自訂年譜」（p.42 - 43）から引用。
- 49 曾紀芬、前掲「崇徳老人自訂年譜」（p.15）による。
- 50 原文：「十余年来侍姑嫜相夫子处妯娌姑嫂間及近年兒媳妾婢輩從無纖芥齟齬」
- 51 原文：「国脈之隆盛基乎家庭而家道之振興関乎教育」
- 52 原文：「近聞東洋下田氏所編家政学緒論闊深條目縝密於家庭義務一帰重於主婦未始不可以開通闡媛整飭坤綱」
- 53 原文：「是編率爾付梓為贈致親友而非求問世」（凡例）
- 54 筆者の調査によると、このような編集方式は、清水文之輔著『家政学』（金港堂、1890年）を参照している。また、下田の原著にない「一家之風範」の内容は、同著の翻訳である。これについては別稿で論じる。
- 55 下田歌子、前掲書、p.12。
- 56 下田歌子、前掲書、p.53。

- 57 『新編家政学』作新社、p.126。原文：「家庭之衛生為家政学中之枢要如此故著者於此篇尤注意焉」
- 58 姚毅「中国における賢妻良母言説と女性観の形成」(『論集 中国女性史』中国女性史研究会編、吉川弘文館、1999年) p.118 - 119。
- 59 原文：「中国女子教育近来漸趨隆隆女子学校之設計当不遠将来此編或供教科或資参考信其必有益焉」
- 60 原文：「擬請下田歌子来同文学校演説書」
- 61 原文：「欧米諸国女子之体育一録下田歌子視察欧州女子教育日記」
- 62 黄金湘「三部日訳『女子教育論』在晚清中国」『河北師範大学学报』(教育科学版)、2007年7月、第9卷第4期、p.56 - 60。
- 63 「大陸発刊之辞」『大陸』第1号、1902年11月
- 64 『中国近代教育史資料彙編 学制演変』上海教育出版社、1991年、p.395。原文：「保姆学堂既不能驟設、蒙養院所教無多、則蒙養所急者仍頼家庭教育、惟有刊布女教科書一法。応令各省学堂将《孝經》《四書》《列女伝》《女誠》《女訓》及《教女遺規》等書、択其最切要而极明顯者、分別次序深淺、明白解説、編成一書、并附以図、至多不得過兩卷、每家交給一本、并選取外国家事教育之書、択其平正簡易与中国婦道婦職不相悖者(若日本下田歌子所著《家政学》之類) 广为譯書刊布。其書卷帙甚少、亦宜家置一編。」
- 65 『学部官報』第一冊、故宮博物院印行、1980年、p.315。原文：「家国關係至為密切故家政修明國風自然昌盛而修明家政首在女子普受教育知守礼法又女子教育為国民教育之根基故凡学堂教育必有最良善之家庭教育以為補助始臻完美而欲家庭教育之良善端頼賢母欲求賢母須有完全之女学」
- 66 「女子師範学堂章程」においては、「家政」と「家事科目」についての規定からみると両者の概念を区別せず同一視している。
- 67 深谷昌志『良妻賢母主義の教育』黎明書房、1998

参考文献

- 大塚豊「中国近代高等師範教育の萌芽と服部宇之吉」『国立教育研究所紀要』115、p. 45 - 64、1988年
- 片山清一『近代日本の女子教育』、建帛社、1984年
- 小山静子『良妻賢母という規範』、勁草書房、2007年
- 瀬地山角『東アジアの家父長制』、勁草書房、1996年
- 陳姪媛『東アジアの良妻賢母論』、勁草書房、2006年
- 姚毅「中国における賢妻良母言説と女性観の形成」『論集中国女性史』p. 114 - 131。中国女性史研究会編、吉川弘文館、1999年
- 『近代日本と中国』上、竹内好・橋川文三編、朝日新聞社、1974年
- 『下田歌子先生伝』、故下田校長先生伝記編纂所、1989年